



Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター

2020年6月15日 第4号

巻頭言 立ち止まるときを 所長就任にあたって

DPC 所長 齋藤 衛



このたび、石居基夫前所長がルーテル学院大学学長に就任したことを受け、私、齋藤が後任を拝することとなりました。自身の力を思えば到底その器ではありませんが、与えられた責任ですので努力して取り組みたいと思います。デール・パストラル・センターを応援してくださる皆さまのいっそうのご理解を頂戴し、その使命を果たしたいと願っておりますので、どうぞ変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

このニュースレターを創刊する際、クリスチャン・スピリチュアリティ部門の所員として私は「霊的深呼吸」の勧めを書かせていただきました。その思いは未だに変わりません。早さと複雑さを要求してくる現代社会にあって、私たちはアクロバティックな日常生活を強いられていると言えるでしょう。知らぬ間に渴いてゆく自分をどこかで感じながら日々を送っていると思われます。私たちが霊的な存在であることをはっきりと踏まえる時を持つために、デール・パストラル・センターは立ち止まって深呼吸する機会を提供いたします。

現下のコロナ禍にあって、この今こそ、神信頼と隣人へのいたわりに向かうこととルターに示されています。「ルターの慰めと励ましの手紙」

(T.G.タッパー編集/内海望翻訳)に収められた「死の災禍・災いから逃れるべきか」では、当時のペスト禍での持つべき人の態度のことをルターが綴っています。この苦難は神さまからの試しなのだというのです。この思いがけない困難さの中で、神さまに対する私たちの態度がどうかという信仰の試練なのだ。そして隣人に対する私たちの態度がどうかという愛の試練なのだ。

私たちにとってもこのように生活が一変することを誰も想定していなかったと思います。しかしこういったことは昔もあって、災難だと思のではなく、この危機についても神さまの試しのだと受け取れることは、私たちにとって励ましとなります。目に見える事態に、目には見えない神の心をルターは立ち止まって祈りのときに聴き取ったのでしょう。

これからの時代に、教会ばかりでなく社会がどのように歩むのか、クリスチャン・スピリチュアリティの果たす役割はいっそう大きいと思われます。デール・パストラル・センターの役割の重さと可能性の広がりを感じています。どうぞ私たちの働きをお支えいただけますよう、よろしくお願いいたします。

この春、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐ目的で、教派を問わず全国の教会の多くは長期にわたり主日の礼拝に共に集うことを制限しました。

そこで今号のニュースレターでは、こうした状況のなかで、教会が教会であるということをごどのように確認していくのかについて、パストラル（牧会的）な視点から考えてみたいと思います。もちろん、この時だからこそ、礼拝について論じ、その重要性を説くことから始めるべきなのかもしれません。いや、確かに礼拝に飢え渴くこの経験を通してその中心性を深く認識させられていると言って良いのです。

それでも、礼拝に集えないというこの現実の中でなお、私たちがどのようにみ言葉に生かされているか、そのありようを言葉にしておきたいのです。一人で行う「黙想」について、「霊性と牧会」について、そしてキリストの業に生かされる「寄り添う」働きについて、この現実の中での格闘をお伝えしたいのです。信仰的格闘の中で、それでもキリストご自身の牧会に生かされ、キリストの体に連なる希望を見ている私たちがあるのです。ここから始めて、信仰的試練の中、主にある私たち自身を捉え直し、新しく立ち上がらされていきたいと思うのです。



「沈黙の詩（うた）」

今、慰めを必要とされる方のために

DPC所員 石居 基夫

デール・パストラル・センターから、どなたにも用いていただける黙想のためのプログラム「沈黙の詩（うた）」をお届けしています。これは、一つ5~6分の動画で、キャロル・サック氏による詩篇の朗読と沈黙、そしてハープ・歌声によって構成されています。簡単な説明動画以外に、12の動画を用意しました。キャロル氏から、「教会で礼拝に集えない今だからこそ、何かできることがあるのではないのでしょうか」とお申し出いただき、実現をしたものです。

動画は、いかにも素人の手によるもの。お分かりいただけるとは思いますが、鑑賞を目的に作ったものではありません。そうではなくて、この動画は、これを通して自らの「黙想」に導きを受け取っていただければという思いで配信させていただいているものです。作成し公開すると、すぐに反響をいただき、一週間、二週間と視聴回数が増えて参りましたので、用いていただけているものと、嬉しく思っているところです。



「沈黙の詩」収録中のキャロル・サック氏

【黙想】

私たちは、普段の信仰生活のなかで「黙想」ということをどのようにもってきたでしょうか。集うことから始まり、賛美、説教、祈り、聖餐、そして奉仕へ。神の働きを受けるのも、それに対する応答を捧げるのも、私たちは、そしてプロテスタント教会は特に、何かの「行為」を通して実現するものと考えがちです。何もしていないという時間に耐えることができないかのようです。

けれども、礼拝に集えないような事態の中、改めて私たちの信仰とは一体何かと問い返されているように思うのです。元気に教会に集い、礼拝に続いてお食事と奉仕を皆でする。学びの時間を

持つ。そうした教会生活にあることが信仰の証であるかのように思い込んできたのかもしれませんが。

何かをすることではなく、どんなに豊かな恵みに生かされているのか。ちょうどイエス様がその宣教の働きの最中に一人山に登られて、祈られたように、私たちは、一人になって、何かをすることよりもむしろただ神によって命が与えられて、生かされ、ここにある（存在する）ということを感じ取っていきたいと思うのです。

黙想とは、私の言葉による祈りの時間なのではなく、今、私に働く主を感じ、信じ、受け取っていくことなのだと思うのです。

【詩編の導き】

この「沈黙の詩」は、礼拝に集えない今だからこそ、黙想する時間をもつただけのように、そのきっかけの一つになればとの願いの中で作られました。そのときに、キャロル先生ご自身が、人間としての霊性を養うために長く用いてこられた「詩編」の導きを取り入れました。旧約の時代から、人々は様々な困難、あるいは苦しみと悲しみの只中であっても、自分に働く神の恵み（ヘセド）を受け取ってきました。「詩編」は、そういう導きに生きる信仰が表され、繰り返し歌われてきた詩なのです。

詩編を読むと、その言葉が自分自身の内側とすぐに重なることもあるし、またそうは思えない時もあるでしょう。しかし、この「沈黙の詩」を通して読まれる詩編を聞くと、まず、私たちは何か心を空っぽにされていくように感じるかもしれません。自分の思い煩いから解かれていくのでしょうか。そして、自分を超えて、その歌われた言葉そのものに導かれていきます。一人の人間として、様々な魂の深みに生きる人々と、そこに働く神のみ業へと心を向けられていく。そうして、深い沈黙へと私たち自身が生かされていくようになる。

【養われる霊性（信仰）】

今、私たちが経験しているのは、ただ礼拝に集えないだけではありません。この感染症が誰にでも突然に死をもたらすような力をもっているために、孤立や分断をもたらします。本来助け合って生きるべき私たちに、不安と恐怖が他者に対する差別や攻撃性を生み出します。そうした現実を肌で感じさせられていて、私たちは誰しもが緊張した生活を強いられて、心も体も硬くなってしまっているのです。

そのようなときだからこそ、私たちの信仰の深みを捉え直していきたいのです。「神共にいます。」その恵みと喜びこそ、キリストの福音です。どんな信仰を生きてきたのか、自分を顧みれば本当に心許なく思うのです。しかし、黙想を通して、主の恵みに出会うでしょう。一人であること不安や恐れ（loneliness）に沈む私たちが一人であることの栄光（solitude）を見出すことへと導かれます。

このプログラム「沈黙の詩（うた）」が、そのような一人ひとりの信仰への一助になっていたらと、そう願っています。



新型コロナウイルス

感染症問題から学ぶ

DPC 所員 堀 肇

新型コロナウイルス感染症が発生した時、まず「何ということになってしまったんだろう」という思いを抱きました。牧師であるからでしょうか。ほぼ連鎖して旧約聖書に出てくる「疫病」、続いて14世紀の中世ヨーロッパに大流行した「ペスト」のことを思い出しました。

現実問題として、主日礼拝を休止しなければならなくなったのは、大きなショックであり、これは牧師になって初めての経験でした。会堂で説教することも、必要以外は教会員と会うこともできなくなりました。しかし不思議なことに、今までよりずっとパストラルになったと感じています。

そしてこんなに信仰や教会の在り方について真剣に考えさせられる経験も珍しいことでした。その考察の中から普遍的な課題と思われることを三点だけ記したいと思います。

1. 自分を問い、神に向き合う機会

私たちは、ここ数カ月、繰り返し「密閉・密集・密接の3密を回避し、人との距離（ソーシャルディスタンス）を取るなど、新型コロナウイルス感染症防止の呼びかけを聞いてきました。その実践として仕事は在宅勤務、学校の授業などはオンライン、店舗は閉鎖、不要不急の外出は自粛するよう行動変容が求められてきました。簡単に言えば、ウイルス感染防止の要諦は物理的にできるだけ「人から離れよ」ということです。リスク管理としては、これが手洗い・マスクに加えてできる精一杯のことだったと思います。

ところで、外出自粛などで長い閉じこもり生活が続くと、心と体の健康を害する可能性があるため、適度の運動や室内で楽しめる趣味をやる、また人との繋がりを電話やSNSを使って声をかけ合うなどが薦められてきました。中にはこうした生活がストレスになった人も多いと思いますが。

しかし、このような行動自粛が余儀なくされ、人と離れるということがすべてマイナスということではありません。人間はひとり閉じ込められたような世界に置かれると内なる自分と対峙し、「人間とは何か、生きるとは何か」というような問いを自らに発し、今まで認識し得なかった自己の姿に気づき、それまで持っていた価値観などを振り返るようにもなるものです。

キリスト者の場合は、そのような哲学的な問いだけでなく、神に真剣に向き合う契機ともなり得るのです。殊にみことばを魂の深みで聴く黙想は、その前提として沈黙 (silence) と孤独 (solitude) が条件となりますから、人との距離を取り、外出自粛が半強制的に求められている時などは、考え次第では、そのよい機会ともなるのではないでし

ょうか。

数年前に鑑賞した映画「大いなる沈黙へ」で公開されたグランド・シャルトルーズ修道院（フランス）の生活を思い出しました。ここは週に一度、日曜午後の散歩の時間にしか人と話すことができません。しかしそこには心が解放され、満ち足りた日々を過ごす修道士の生活が見られるのです。

私たち現代人は、ふだん喧噪と饒舌に満ちた世界にいますが、このある意味で強いられた孤独(独りであること)の中で、その時を無駄にせず、自分自身と神に向き合う機会にしたいと思うのです。主イエスも時には弟子たちを群衆から引き離し、「強いて舟に乗り込ませ」（マルコ6章45節）、向こう岸に行かせようとされたほどですから。

2. エクレシアの本質を考える契機

コロナ問題に直面した時、以前ある人が「キリスト教は集会の宗教だ」と語気を強めて語っていたのを思い出し、その説明不足とも思える単純な表現が急に意識に昇ってきました。確かに「集まること」に重点が置かれ、いつも物理的に集まった人数（出席者数）を評価の対象にしてきた教会の歴史があります。しかし、この度、新型コロナウイルス感染症が発生し、学校閉鎖や在宅勤務また個人や家庭においても外出自粛などが要請され、教会も集会の自粛や休止を余儀なくされるに至りました。つまり「集まる」という行動に外発的な制限が加えられ、評価の対象にもされてきた集会が開けなくなったのです。しかし信仰共同体に属する人々は存在しています。暫定的であっても礼拝説教はオンラインやCD・DVDなどを用いて信徒に届けられてもいます。いま通常の共同礼拝や交わりなどはできませんが、信仰共同体は存在しているのです。

さて、このような状況に直面してみますと、集まって活動をするということの中核的な業としてきた教会は、それができないという事態の中で、改めて「教会とは何か」、「集会とは何か」という、

エクレスシア（主の名によって集められた人々）の本質に向き合うことになったと言えます。換言すれば信仰共同体の本来的な在り方を再考する契機となったと言ってよいでしょう。端的に言えば、集まることができなくなって、改めて教会は集会をしていけば良いというのではなく、目に見えなくても互いに繋がる霊的共同体でなくてはならないという認識を新たにしたのではないのでしょうか。余りにも自明な命題ではありますが。

私はこの度のコロナウイルス禍により教会員や関係者に会う機会は奪われましたが、教会員名簿を見て祈り、また電話やメールを通してコミュニケーションを図る頻度は増えるなど、牧会配慮は以前より深まり、「共同体感覚」は強くなったように感じています。合わせてこのような状況の中で、ヘンリ・ナウエンが語った「不在」（アブセンス）によるミニストリーが思い起こされました。通常は人に会い、語り、そこに「存在」（プレゼンス）することが求められるのが牧師ですが、「不在」による非言語的な関係の中で相互の配慮やより深い祈りの世界を認識することになりました。コロナ問題は教会の在り方、牧会のある種の盲点に気づかされたという点で意味ある時となったのです。

3. 成熟した連帯性の形成

どのくらいの人がそう考えているのか分かりませんが、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行（パンデミック）は、実を言えば現代文明の特徴でもあるグローバリズムと深く関わる問題なのです。世界はこれを明るい未来を約束するかのごとく強調・推進してきました。人や物や金が国境を越えていくだけでなく、おびただしい情報交換や人口移動、またそれに伴い未知の病原体も世界中に拡散することになったと言っていいでしょう。

過日都内の某大学の学長は昨年度の卒業式でコロナ問題に触れ「人類は感染症に国境がないことを思い知らされた。あらゆるものが国境を越え

て流動するグローバル化の負の側面を露にした」と語りましたが、確かにこの「負」は自然界を含めての人間の世界に対する謹みのない行動への逆襲のように思えてなりません。

翻って教会の歴史を振り返ると、キリスト教はもともとイエスの言葉に従って「ユダヤとサマリヤの全土、地の果て」にまで宣教し、いまや世界中に広がっていますが、グローバリズムは一つの警告を放っています。それは私たちが世界に伝えるキリスト教の内実は「福音」（良きおとずれ）なのか、その伝達的手段も含めて自らを問わなければならない。宣教や伝道が牧師の自己実現の手段となっていないか、教団や宣教団体の目的・目標が組織の維持や拡張になっていないか、もしそのような要素があるなら、福音ならざるものの「感染」に気をつけなくてはなりません。

コロナ問題はもう一つの難問に直面しています。それは先進諸国において既に見られるもので、これを契機に人の移動が抑えられ、生産も消費も停滞し、グローバル化の失速・停滞が予想されます。それに伴って自国第一主義・保護主義・分断などが急速に世界に広がる可能性があります。それがポスト・コロナの大きな課題です。これを取り切るために強い連帯が必要になります。

キリスト教会もここをよく考えていないと、今まで（高度成長期の価値観や哲学）のように、世の波に飲まれてしまいます。多様性をもちつつも一つの体であるという連帯性を失わないことです。〇〇教団ファースト・〇〇神学校ファーストというような自閉的な保護主義や競争原理を超越し、身近な存在（個人・教会・団体）を大切にす健全かつ成熟した連帯性を求めつつ信仰共同体の形成に励みたいと思うのです。





グリーフのなかにある方々に寄り添うこと

DPC 所員 小嶋 リベカ

●「その人らしさ」を尊重する

デール・パストラル・センター (DPC) のプログラムの一柱であるソーシャル部門では、隔月1回、だいじな人と死別した子どもとその保護者のグリーフサポートの集まりを開催しています。その際、ファシリテーターと呼ばれる支え手は、当事者の「その人らしさ」を尊重し、心身の安全と安心が守られる空間を提供することを大切にしています。当事者は、孤独感や、先が見通せない不安感、自分ではどうしようもない事柄への無力感などを抱えてところが揺らぐことがあります。そのようななか、個を否定されず、安全と安心を実感できる関係性が大切となります。このような関係性は、グリーフサポートに限らず、医療、教育、福祉など、地域社会の様々な領域で欠かせません。

現在筆者が勤めるがん専門病院においても同様のことがいえます。緩和ケアチームに属する筆者の役割は、未成年の子どもを育てる若年がん患者とその家族を支援することです。この支援の目的は、『病気の患者』という側面からだけでなく、『その人らしさ』を大切に、その人と家族の社会生活を含めて支えること(国立がん研究センターがん情報サービス HP より抜粋)です。

ところが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、支援もこれまでどおりとはいけなくなりました。入院患者への面会は制限されました。患者は感染症からの安全は守られますが、家族や友人など親しい者と、身を寄せ、触れながら安らぐ関係性が得られにくくなりました。同じく看護のあり方も変化せざるを得ません。しかし、この非常事

態であったとしても、先ほど紹介した、患者・家族への支援の原則が軽んじられるわけではありません。つまり、「その人らしさ」を大切に、その人と家族の社会生活を含めて支えることが重んじられるのです。

本稿では、「その人らしさ」を尊重することを念頭に、グリーフのもつ個別性について、またそこに寄り添う支え手のあり方について、臨床から教わったことを述べたいと思います。

●グリーフの個別性

グリーフ (grief) はしばしば悲嘆と訳され、身近な人との死別や離別、予期せぬ病気や災害など、大きな変化に伴う心理的・感情的・身体的な「いたみ」のことをいいます。疾患に伴う「痛み」であれば、主治医がそれを和らげるための処置に努めます。他方、この喪失に対する「いたみ」は、多くの場合、当事者と支え手の関係性がいたみを和らげるのです。

いたみには主に二つの特徴があります。一つは、個別的な表現がされることです。いたみを抱える10人が10通りの文脈で異なる表現をします。例えば死別に対する表現は、同じ家族であっても異なります。当事者はこの個別的な表現を支え手に尊重されることによって、混沌とした今を肯定する力が得られます。

特徴の二つ目は、個別的なプロセスを経ることです。喪失に伴うグリーフ (いたみ) は、疾病のように完治を目指すものではなく、折り合い方を模索しつづけるプロセスなのです。当事者にとっては、出会ったその時だけを理解されるより、プロセスを経ていることを認識してもらって、支え手に包みこむように受け止めてもらえることで安心感が得られます。

●グリーフに寄り添う支え手のあり方

宗教学者の島藺進氏は、「グリーフを分かち合う共同性は血縁・地縁・友人関係等によって成り立つだけではない」と述べています(『ともに悲嘆

を生きる』朝日新聞出版、2019年)。つまり、誰もがいたみを抱える当事者の支え手になり得るのです。

支え手は、いたみを抱え、こころ揺らぐ人の姿をみると、手を差し伸べたくなるかもしれません。しかし、支え手は、解決の道を教え導く必要はなく、安全で安心できる関係性を築くことが大切です。

グリーフに寄り添う支え手のあり方として、心にとどめておきたいことを二つあげます。一つは、相手の話をよく聴き、いたみの瞬間にともに在る(Being)ことです。自分の専門性や体験を用いて相手のいたみを解釈したり、助言したりする直接的な言動(Action)で間を埋めるのではなく、相手の言葉と沈黙から可能な限りの文脈を想像しつつ、その瞬間にともに在ることによって、「いたみを分かち合う共同性」が成り立つのです。

次に、支え手自身の内面にも揺らぎが生じ得ることを知ることです。揺らぎは当事者にとどまらず、その支え手にも影響を与えることがあります。例えば、支え手が、当事者と同じように無力感を抱く場合、何事もなかったかのように振る舞うのではなく、あるいは次から揺らがないことを目指すのでもなく、自らの揺らぎに気がついていることが大切です。もし、相手の気持ちに寄り添いすぎると、相手の感情に自分の感情も同化し、自分自身が疲弊します。反対に、相手の気持ちに距離をおきすぎると、こちらの側の感情が鈍くなり、相手が安心できない可能性があります。このように、寄り添いすぎても、離れすぎても、安全で安心できる関係性を築くことが困難となります。

支え手のあり方は、伴走者の姿にたとえることができます。伴走者は、相手を引っ張るのでも押すのでもなく、背負って走るわけでもありません。当事者を主体とし、支え手は見守りつつ、ともに在ることが重要なのです。

●ある出会いから教わったこと

小学生の子どもがいる患者(母親)が、次のよ

うに筆者に語りました。「唯一の望みは、子どもに「いってらっしゃい」と「おかえりなさい」を毎日、言ってあげられること・・・」「死ぬのは怖くない。でもいま、死ぬわけにはいかない。せめて子どもが成人するまでは・・・」。母親としての言葉と沈黙をともにしたとき、筆者は証人であるかのように、ともに在ることを心がけました。子どもへの深い愛情と、しかし母親としての無力感など、そのいたみを取り除こうとするのではなく、思いめぐらすことにしました。なぜなら、そうすることが、力みのない「その人らしさ」を維持する一助となり得ること、「いたみを分かち合う共同性」を保ち得ることと考えるからです。この患者は、その後、子どもが成人を迎えるまでの誕生日カード、入学・卒業祝い、成人祝い、結婚祝いのカードを、丁寧にのこしていきました。すべてのカードのどこかに「ママはあなたの味方よ」と書き添えたそうです。



新型コロナウイルス感染症拡大に伴って、日常の中でいたみに気づくことが増えています。医療の現場においても、患者やその家族のみならず、力を尽くす医療関係者も、それぞれにいたみを抱えています。その現状に闇が深まる感覚をおぼえます。

しかしながら、これまでもそうであったように、現在は未来と断絶されているわけではありません。現在の一面において、なしうる工夫を重ねながら、誰もが支え手として、誰かの伴走をしつつ、いたみを分かち合うバトンが引き継がれているのです。そのようないたみを分かち合う共同性が、規模の大小に関わらず社会の中に点在しているのです。先行きの見えない現状にあって、そのことは、一筋の光といえます。





『身体はトラウマを記録する-脳・心・体のつながりと回復のための手法』

ベッセル・ヴァン・デア・コーク著、柴田裕之訳 紀伊國屋書店 2016年

マサチューセッツのトラウマセンターの創始者、かつこの分野での第一人者がこれまでの臨床データと数多くの患者との出会いをもとに、いかにトラウマが身体、そして精神に影響を及ぼすかを紹介する。ヴェトナム戦争、アフガン戦争、イラク戦争から帰還し戦地での強烈な体験からトラウマに苦しみ続ける者の数は計り知れない。統計によれば毎年8,000人近くの帰還兵が自死している。

もちろん問題は帰還兵1人のことではなく、その家族や周りの人々の人生に襲いかかる大きな闇の力のことなのだ。そして、同様のことは虐待、暴力、事故、テロとありとあらゆる形をとり、人々の日常、そして生涯を奪っている。この負の力に、向精神薬は症状を一時的に緩和できたとしても、根本的な癒しや治療からははるかに遠い。

トラウマ患者の心は悲鳴をあげ、影響は身体に出始める。不眠、下痢や吐き気、動悸、発汗、呼吸の浅さ。時に虚脱状況や身体が無感覚症状にさえ陥る。そのような中で「生きている」という感覚を取り戻す為に人は自傷や他害という行動をとってしまう。

本書に書かれている事例や臨床データを読んでいるとあることに気がつく。それはこのようなケースは歴史の中の出来事や何処か遠くの外国で起きている事柄ではなくて、私が生きるこの国、地域、そして私自身の中でも起きているということである。銃弾が飛び交う戦地でないとしても誰もが自分では抗えない力や圧力に押しえつけられ、傷つくしかなかった経験がある。その経験をひた隠し、けれども抑えきれず身体症状、癖として現れ、人間関係にも様々な問題をもたらしてしまう。大なり小なり誰もがトラウマ体験を持っているのだ。

本書では薬物治療のみならず、EMDR（眼球運動による治療方法）・ヨガ・演劇・マインドフルネス・ニューロフィードバックなど多角的な治療法とその効果を紹介している。そしてその中でも人との交流、コミュニティを通しての癒しに本書はスポットを当てている。トラウマを負う時、全世界が自分を理解せず疎外するエイリアンの集合体のように感じてしまう。そのような極限状況にあって誰かが真実にその人に眼差しを注ぎ、苦しみに耳を傾け、その存在を受け止めるならば、そこから癒しが生まれ始める。「どのような医師にも友情や愛の処方箋は書けない。友情や愛は複雑で努力しなければ手に入らない」と著者は語る。傷が深まる世界の只中において、人間の根源的な癒しを求めて分かち合っていく努力の重要性を教えてくれる一冊である。

(DPC 所員 関野 和寛)



●『詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～』 第Ⅲ期

開講が9月に延期されております。つきましては7月に改めて開講のご案内をHPに掲載いたします。

●『沈黙の詩(うた)』本文でご紹介いたしました本プログラムは本学HP(下記)にて視聴いただけます。

【編集後記】

現代人が経験したことの無い状況が今後何をもたらすのかという不安、しかしその中でたいせつなものを見つめていた。その思いが今号にこめられています。皆さまのご健康が守られますことをお祈りいたします。

発行：日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人：齋藤 衛

181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 TEL:0422-26-4580 (直通) E-mail: dpc@luther.ac.jp <http://www.luther.ac.jp/>